硫黄島玉砕と本土空襲激化

平成19年1月13日　高根台公民館

サイパン島を発進したB29が、初めて東京上空に姿を現わしたのは朝から快晴の昭和十九年十一月一日でした。たった一機、房総半島の勝浦から侵入し、午後一時過ぎ松戸、調布、成増の基地から迎撃機が飛び立ちましたが、高度は一万㍍。そこまで上昇出来る戦闘機は少なく、高射砲弾も七千㍍が限度で届きません。B29は爆弾を落とすこともなく、都下武蔵野町の中島飛行機工場を写真撮影すると午後三時前、四本の飛行機雲を引いたまま悠々と洋上に飛び去ったのです。

私がB29を見てまず感じたのは、実に美しい飛行機だと云うことでした。全長三十㍍、幅四十三㍍。ちょうど細長いバットに翼がついたような感じで、低空飛行の場合に施す迷彩の必要もなく、アルミの地肌そのままに銀色の機体をキラキラ輝かせていました。しかしその性能となると、まさに「超空の要塞」の名前にふさわしいものだったのです。最高時速は戦闘機並みの五百七十七㌔、爆弾搭載量が最大で九㌧、航続距離は四㌧の爆弾を積んで五千五百㌔。増槽タンクをつければサイパン―東京間二千㌔余りを楽々往復出来る十五時間の飛行も可能でした。機内三か所に気密室があって、高度一万㍍でも二千㍍と同じ状態を保ち、十一人の搭乗員は酸素マスクなしで行動出来ました。日本海軍の一式陸上攻撃機と比べても、爆弾搭載量で九倍、飛行速度で一・五倍、それでいて航続距離は二・四倍と云う凄さです。

このB29はもともとは、強力なドイツ空軍に対抗するために開発されたものでした。ところが十七年九月に試作一号機が完成すると、アメリカは対日戦勝利の近道として、ヨーロッパ戦線は既存のB24、B17爆撃機に任せて、量産態勢に入ったB29全機を太平洋戦線に投入してきたのです。十九年六月のサイパン攻略戦は、云うならばB29のために行なわれた作戦でした。アメリカ統合幕僚会議は、日本を屈伏させるには本土進攻作戦もやむなしとしていましたが、その前に強力な爆撃と空と海からの封鎖によって、日本の戦力を出来るだけ減らしておく必要がありました。それには、これほど長距離を飛べ、安全に大量の爆弾を投下出来る爆撃機はありません。米軍は七月七日にサイパン、八月二日にテニアンを占領すると、八月十日には早くもB29の基地として使用を開始し、グアムを含めたマリアナ基地に常時一千機配備の態勢を整えていったのです。

日本の方は、マリアナ沖海戦、レイテ沖海戦で連合艦隊が壊滅状態となり、陸軍もレイテ決戦に敗れて本土の防備強化を急いでいました。しかし、中心となる

航空兵力となると、陸海軍の実働機が台湾から本土まで掻き集めても六百二十六機。一応防空戦闘機と銘打ってある八百七十機も、実働は三分の一と云う状況です。本土防空は陸軍の担当でしたが、帝都防空の専任部隊として第十飛行師団を編成したのが十九年三月でした。胴体や主翼の日の丸の周りに白い帯を描いて、クッキリ日の丸を浮かび上がらせた戦闘機をご記憶の方もいらっしゃると思いますが、これは「本土防空」の任務を示す目印でした。しかしその迎撃能力となると、これまたお寒いものだったのです。一万㍍のB29を墜とすには、十五分から二十分くらいの短時間で上昇、接近出来る性能が要求されました。ところがほとんどが四、五十分もかかってしまい、しかもその上昇高度を維持するのが難しく、失速して一気に数千㍍も落下してしまいます。そのうえ高い高度での戦闘能力も六千㍍限度の設計で、B29の迎撃にはまあ平幕が横綱に立ち向かうようなものだったのです。レイテ決戦で神風特別攻撃隊が出撃してからは、陸海軍の航空部隊は「総特攻態勢」に入っていましたが、第十飛行師団長の吉田喜八郎中将も十一月七日、各基地にB29に対する特攻隊編成命令を出しています。体当り以外に有効な手立てはないと云うわけです。

機動部隊を中心とした攻撃専門だった海軍が、初めて本土防空の専任部隊として愛媛県松山基地に第三四三航空隊を編成したのは十二月二十五日です。「海軍航空の神様」と云われた源田実大佐、戦後航空自衛隊幕僚長、参議院議員になった源田の発案で、新鋭戦闘機「紫電改」と生き残りの熟練パイロットを集めて、源田自ら司令に就任しています。しかし呉の海軍基地と西部防衛が任務ですから、B29が東京に来ても間に合いません。そこで海軍も年が明けた二十年二月五日、帝都防空部隊として厚木に第三〇二航空隊を新設したのです。B29迎撃用のロケット機「秋水」が完成次第配備される予定で、司令には敗戦の日、「徹底抗戦」を叫んで「厚木の反乱」として有名になった小園安名大佐が就任しています。

B29の来襲は昼間の偵察から始まりました。十一月二十三日まで十回にわたって、一機か二機で高高度から東京の攻撃目標を写真撮影していったのです。本格的な東京空襲は二十四日昼すぎ、大挙九十三機で中島飛行機工場を集中爆撃したのが最初でした。死傷者五百五十人を出しましたが、見田義雄伍長が戦闘機「鍾馗」を体当りさせたのはこの時です。水平舵をもぎとられたB29は海に墜ちていきましたが、これがB29に対する特攻第一号でした。B29は最初のうち二通りの方法でやって来ています。一つは百機前後の大編隊による高高度からの昼間爆撃で、中島飛行機の武蔵製作所を五回、名古屋の三菱重工発動機製作所を二回、日本の航空機工業壊滅を狙って心臓部を集中爆撃をしたものでした。もう一つは夜の空襲で、こちらは一機か二機、下町の密集した人家に焼夷弾を投下しましたが、都民は毎晩のように寝入りばなを起こされ、睡眠不足。精神的に参っていきますが、それを狙った神経戦でした。

二十年の元日もB29二機の来襲で明けました。東大航空研究所の教授富塚清は「戦中日記」に「ひと眠りしたら、またウーだ。『除夜の鐘、今年はウーで代用哉』というのが、年越しの辞」と書いています。外交評論家清沢洌の「暗黒日記」には「昨年から今暁にかけて三回空襲警報鳴る。日本国民は、いま初めて戦争というものを経験している。戦争は文化の母だとかいって、戦争を賛美して来たのは長いことだった。僕が迫害されたのは、反戦主義という理由からだった。戦争はそんなに遊山に行くようなものなのか。それをいま彼らは味わっている。それでも彼らが本当に戦争に懲りるかどうかは疑問だ」とあります。日本の国民にとってそれまでの戦争は全て外地でした。国民が戦争の悲惨さ、戦局の悪化を実感するようになったのは、このB29が定期便のようにやって来てからと云ってもいいでしょう。

宮中の四方拝も昭和天皇は軍服姿、御文庫の庭でという異例なものでした。四方拝は例年なら、篝火のたかれた神嘉殿の前庭に金屏風をめぐらせ、天皇が伊勢神宮をはじめ天地、四方の神々、山稜を遥拝して、国家の隆昌、皇室の安泰を祈られる元日の重要な儀式です。天皇は空襲が始まってからコンクリート造りで地下壕のある御文庫で暮らされていましたが、午前四時過ぎに起きるとまた警報のサイレンです。御文庫の庭に畳一枚を敷いて、急拵えの礼拝の場で済まされたのですが、天皇はこの非常、異例な四方拝に、終戦の決意を固め、神々に祈られたのではないでしょうか。この年の年頭の御題「社頭寒梅」に、「風寒き霜夜の月に世をいのる ひろまへきよく梅かをるなり」と歌われています。「風寒き霜夜」は明らかに厳しい戦況のことで、「梅香る世の平安」を祈られたのです。一月六日には内大臣の木戸幸一に、「重臣たちの戦局に対する意見を聞きたい」と言い出されています。

私たちが下から見上げるB29はまさに無敵、憎らしいほど強いB29でした。それでも基地航空部隊は、上昇スピードに難点を抱えてはいたものの、それぞれの戦闘機の特徴をフルに生かして実によく戦ったのです。ドイツのメッサーシュミットの液冷式エンジンを搭載した「飛燕」は、当時最も優れた戦闘性能を持つ戦闘機でした。復座の双発戦闘機「屠竜」は胴体トップにつけた三七ミリ機関砲が威力を発揮しましたし、「疾風」は防弾装置が頑丈に造られ、高度九千メートルまでB29と互角に戦えました。厚木基地の「雷電」は海軍が初めて作った局地戦闘機ですが、六千メートルまで六分で到達し、時速もB29を上回る六百十二キロです。両翼につけた四挺の二十ミリ機銃のほか、独特の二十ミリ斜め銃がB29の死角からの攻撃になって、撃墜に最も大きな効果をあげたと云われます。夜間戦闘機「月光」も胴体に上向きと斜め下向きの二十ミリ機銃を装備し、B29の編隊を後ろ下方から攻撃しました。

これは戦後になってわかったことですが、いくら「超空の要塞」と云っても、戦闘機の護衛なしでは犠牲も大きかったのです。十九年の年末までに撃墜または被

弾しての不時着で百五十機を失い、八百九十一人の戦死者を出していました。終戦までに撃墜、破壊されたB29は四百十四機を数えたそうです。第十飛行師団長の吉田中将は大晦日の日記に書いています。「此の二カ月間に敵を迎うること四十回、来襲敵機六百三十八機…戦果 撃墜確実二十八機(内十六機は特攻隊の体当りによる)不確実二十四機…我損害 戦死二十八名(内特攻隊の体当り自爆十名)戦傷十名…」。そして特攻隊の編成命令は、吉田にとっても胸ふさがれる思いだったのでしょう。こうも書いています。「此の如く、予期したる戦果を挙げ得ざりし主原因は我の科学技術の立ち遅れに存し、その欠陥を補う為に無理と知りつつ無理を強行せざるを得ず。右の戦果の半数以上は実に此の無理の強行によりて獲ち得たるものにして、全く涙なくして語るを得ず」。

技術院総裁の八木秀次、戦後大阪帝大総長になり文化勲章を受章した八木も、二十年一月の議会で科学技術の遅れを率直に詫びています。「最近、必死必中ということが言われるけれども、必死ではなくて、必中であるという兵器を生みだすことが、われわれかねての念願なのである。が、これが十分に活躍する前に、戦局は必死必中の神風特攻隊を必要とするに至ったことは、技術当局として誠に慚愧にたえず申し訳ないことと考える」。清沢洌は日記に八木の答弁を紹介して「この答弁は議会で非常な感激を生んだ。泣いているものもあったという」と書いています。

ところでB29の予想を上回る大きな損害は、米軍首脳部を愕然とさせるものだったのです。統合幕僚会議は二十年一月、相次いで重要な決定をしています。マリアナ基地のB29爆撃兵団司令官ハンセル准将が実施してきた昼間高高度からの飛行機工場への爆撃は、思ったほど成果があがりません。護衛戦闘機がつかないため、極端に燃料を食う超高高度を飛ぶほかなく、精密爆撃が望めないうえ、爆弾搭載量も三分の一に減らしていました。昼間爆撃を続ける限り損害はさらに大きくなることが予想され、一月二十日ハンセルを更迭して、夜間低空からの焼夷弾攻撃、無差別爆撃を主張するルメイ少将と交代させたのです。

もう一つは、サイパンと東京の中間に位置する硫黄島の存在です。もともと米軍にとって是非とも手に入れたい戦略目標であり、幕僚会議は十九年十月、「硫黄島及び小笠原諸島に一つ以上の拠点占領」をニミッツ太平洋艦隊司令長官に命令し、作戦開始目標を二十年一月二十日としていました。それがルソン作戦の関係で遅れていたのですが、B29の爆撃を効果的なものにするためには、護衛戦闘機の発進基地獲得が急務になったのです。被弾した故障機が、途中不時着する飛行場も必要です。その唯一無二の適地が硫黄島でした。しかも日本の航空基地があるため、マリアナはここを中継基地にした日本機の奇襲攻撃にさらされ、十一月二十七日にもサイパン、テニアンでB29四十六機が大破、損傷という大きな被害を出していました。幕僚会議は一月二十二日、硫黄島上陸作戦を「二月十九日

決行」と決定したのです。

硫黄島は東京から南に千二百㌔、面積二十平方㌔と、東京の港区とほぼ同じ大きさのシャモジのような形をした小さな火山島です。明治二十四年に「日本所領」を宣言、昭和十五年には東京府硫黄島村となり、千二十九人の住民が暮らしていました。海軍も昭和八年に千鳥ケ原に飛行場を建設していましたが、戦局の悪化で「絶対国防圏」の要衝、ここだけは絶対に守る島としたことから、島民の内地引き揚げが始まりました。十九年七月までに軍属として残った男子百二十五人を除いて全員がが引き揚げ、代わって海軍の島に陸軍部隊の増強が始まったのです。

新しく編成された第百九師団長の栗林忠道中将が、硫黄島に着任したのは六月八日でした。師団司令部は、要塞守備隊があって通信、補給施設が整っている父島にすべきだと云う意見がありましたが、栗林は硫黄島が米軍の攻略目標になるとの確信から、敢えて硫黄島に司令部を置いたのです。そこには、指揮官として率先、戦場の焦点に立ち、灼熱の島で将兵と苦楽を共にしたいと云う、栗林の考えがあったからでした。そして硫黄島の戦いこそは、指揮官ひとつでこうも違うのかと思うほど、栗林が自分の意志を徹底させた見事な戦いだったのです。

このところ、大変な栗林ブーム、硫黄島ブームです。昨年末クリントン・イーストウッド監督の「硫黄島」二部作が公開され、皆さんから頂いた年賀状にも何人もの方が「観てきた」と書いておられました。今月発売の文芸春秋には「栗林中将、衝撃の最期」という記事が載っています。「栗林の最期は、ノイローゼになって部下に斬り殺されたのが真相だ」。こんな説があって「散るぞ悲しき」を書いたノンフィクション作家梯久美子さんが綿密な検証をして否定していますが、栗林はそれほど、あの絶望的な戦いの中で、心に残る見事な将軍だったと云うことでしょう。栗林は長野中学出身、カナダ公使館付武官、アメリカ大使館勤務と外国経験を持ち、騎兵連隊長、陸軍省馬政課長と騎兵関係を歩みました。課長時代に作った「愛馬進軍歌」は馬に対する愛情細やかな歌で、教養豊かな栗林の才能を感じさせます。戦争中「ああ堂々の輸送船」とよく歌われた「暁に祈る」も、この「栗林の隠れた作だ」と云う説があるんだそうです。歌の本には「野村俊夫作詞」となっていますが、「愛馬進軍歌」も「久保井信夫」のペンネームでしたし、「苦労を馬と分け合って」とか「ああ傷ついたこの馬と」と、馬が再三出てくるあたり、あるいはそうなのかも知れません。

栗林がまず考えたのは、この島でどのような作戦構想で戦闘準備をするかでした。何しろ島の端から端まで一番長いところで八・三㌔、狭いところはたった八百㍍しかありません。島全体がほとんど平坦で、わずかに南端に標高百六十九㍍の摺鉢山が盛り上がっているだけです。地形から見て、戦術的にこんなに守りにくい島はないでしょう。栗林の結論は、島全体を活用した持久戦法、そのためには島全体を地下要塞にしてしまうことでした。それまでに構築されている陣地は

まず敵の上陸を防ごうと、水際撃滅戦法に基づく海岸配備でしたが、栗林は着任早々それを改めて、縦に深い縦深陣地の構築を命じたのです。米軍は必ず徹底した艦砲射撃と爆撃で上陸地点を制圧してから、その援護の下に強力な部隊を迅速に上陸させています。これまでの水際撃滅戦法は、とても通用しないと考えたのです。事実、その直後に始まったサイパン攻防戦では、海岸配備の主力部隊の組織的な戦闘は、わずか三日間で壊滅しています。参謀本部がこのサイパン敗戦の教訓から、水際撃滅戦法を否定し、後方配備を命ずる「島嶼守備要領」を各部隊に通達したのは八月十九日です。これを見ても、栗林がいかにしっかりした火力認識を持ち、先見性に優れた戦術家であったかがわかります。

とは云っても、硫黄島の環境は劣悪そのもの、容易なことではありませんでした。至る所で火山の噴煙が噴き出し、どこへいっても硫黄ガスの臭いが立ち籠めています。何よりも将兵を苦しめたのが、水が決定的にないことでした。島には川も湧き水もなく、雨水以外に飲料水はゼロ。そこへ陸軍一万七千、海軍五千人の将兵が充満したのです。少しでも傾斜があればその下に溜め池を作り、硫黄の蒸気のしたたりも一滴二滴と貯め、木の葉の露さえ集めました。それでも一日一人水筒一本に制限され、入浴はもちろん洗顔さえ出来ません。野菜を栽培しても硫黄分が混じるためか、必ず下痢に見舞われ、乾燥野菜に頼るしかありません。

栗林が各部隊に指示したのは、二百五十キロ爆弾、戦艦主砲の直撃弾にも耐えられるよう、徹底した地下洞窟陣地の構築でした。北地区の師団司令部は深さが地下二十五メートル、全長六十メートル、天井コンクリートの厚さは三メートル。元山や島中央部の主要陣地には二層、三層の地下壕が掘られ、岩盤の摺鉢山も乏しいダイナマイトを使って三層にしました。海岸地帯には半地下式のコンクリート製トーチカを配置し、トーチカ相互は地下で連結しました。また島を一周する地下道路を作って、随時随所に敵を背後から攻撃出来るようにしたのです。

私の読売の先輩で政治部長をした多田実さん、昨年亡くなられましたが、「海軍学徒兵、硫黄島に死す」と云う本を書いています。硫黄島は学徒出陣の百八十三人、海軍学徒兵が最も多く戦死した戦場でしたが、多田さんも海軍予備学生の少尉として赴任し、米軍上陸前に空襲で負傷したため内地に送還され、九死に一生を得た人です。多田さんの機銃砲台に突然、着任したばかりの栗林が視察にやって来ました。「南海岸機銃砲台、人員兵器異常なし」と報告すると、砲台と眼下の南海岸をゆっくり見回し、「おお、これは大変な所だね」、そして「多田少尉は学徒出身ですね、ご苦労をかけるがしっかり頼みます」と声をかけたと云うのです。所属の違う一少尉の履歴をちゃんと調べているあたり、多田さんは暖かい人柄を感じて、その第一印象を「栗林中将の眼は優しかった」と書いています。しかし多田さんによると、地下掘り作業はまさに言語に絶する苦役だったそうです。兵隊たちはツルハシ、スコップ、モッコと原始的な用具で掘り進めましたが、た

ちまち硫黄の猛烈な熱気が噴き出し、地下十㍍を超えると地熱は四十度、五十度に上昇、履いている地下足袋のゴム底さえ溶けました。褌一つで防毒マスクをかぶっても一回の作業時間はせいぜい五分間。五人一組で一昼夜掘って一㍍掘れれば良い方で、元気な兵隊でも半日作業をすると、後の半日は使いものにならなかったと云います。兵隊たちは心身共に疲労し、悪性下痢や栄養失調など病人は常に四千人を超えました。自殺者も出ましたし、自傷と云って内地送還を狙って自分の銃で自分の足を撃ったのがばれ、軍法会議で銃殺刑になった者もいました。

陸海軍の幹部からは「これでは敵上陸前に戦闘力を失ってしまう」。強い反対が出ましたが、栗林は「砲爆撃で犬死にするためこの島へ来たのではない」とはねつけ、決して妥協しようとはしなかったのです。そして「敢闘の誓い」を定め、「我等は各自敵十人を殪さざれば死すとも死せず」、「我等は最後の一人となるもゲリラに依って敵を悩まさん」。将兵がこの合言葉のもとに団結したのは、栗林の優れたリーダーシップにありました。栗林は指揮官陣頭、軍紀厳正、上下一体を方針に、例えば水筒も兵隊と同じに一日一本。それを持って島内を隈なく歩き、築城作業を自分の目で確かめて指導したのです。部下たちは「閣下が誰よりも一番島の様子をご存じだった」と回想しています。もう一つ、栗林が将兵を心服させたのは、将校に対する細やかな指導でした。「将校は兵の食事に満幅の注意を払ふを要す。将校の分のみ別に食事し、兵の給食が如何なる状態に在りやに無関心なるが如きこと、断じてあらざるを要す」。こんな将軍がいたでしょうか。栗林の生き方はそのまま、いつの世にも上に立つ者には何が一番大切かを教えています。日本陸軍の弊害は、将軍は参謀任せで威張っているだけ。その参謀は、命令さえ出しておけばその通りになるはずだと、前線の状況を見ることさえしなかったのです。ノモンハン、ガダルカナル、インパール、みんなそうでした。

こうして総延長十八㌔余りの地下壕が完成し、硫黄島は「要塞の島」に変貌したのです。火砲二百八十門、戦車二十三台、弾薬は三十万発、食糧も七十五日分の備蓄が出来ました。栗林が立てた戦闘計画は、兵士はみんな地下に入れ、迫撃砲や対戦車砲、重機関銃も全て洞窟陣地に据え付ける。とにかく「地下で戦おう」と云うのです。ただ一つ栗林の心残りは、重要拠点の摺鉢山と元山をつなぐ地下道路が未完成だったことです。もし出来ていたら、戦況に応じて随時兵力の移動が可能になり、米軍の背後から攻撃することも出来たはずでした。

米軍の硫黄島攻略作戦は二十年二月十六日、艦船八百隻、航空機千六百機の猛烈な砲爆撃で始まりました。それから三日間、実に爆弾百二十四㌧、ロケット弾二千二百五十四発、艦砲射撃で三万八千五百五十発も撃ち込んできたのです。摺鉢山は七分の一がなくなり、島全体が爆煙に包まれ、もはや生きている者は存在しないとさえ思えたほどです。米軍も「上陸後五日間で占領の予定」で楽観していました。しかし日本軍は、地下でこの砲爆撃にじっと耐えていたのです。

アメリカ機動部隊はこれに呼応して、この日と翌日、艦載機延べ千四百機で関東、東海地区を空襲しています。艦載機の本土来襲は初めてのことで、参謀本部戦争指導班長の種村佐孝大佐は「大本営機密日誌」に、「この大機動部隊が帝都の玄関先で猛威を振う間、これに一矢を報いるものもない。国民の戦意を喪失せしめるもの、これより甚だしきはなかった。今後の帝都の物的、国力戦力の激減が予想せられた」と書いています。

海兵三個師団七万五千人が硫黄島沖に到着したのは十九日早朝でした。午前八時半、第一波上陸用舟艇が南海岸に向かいましたが、いつもの日本軍と違って小銃弾一発飛んできません。「上陸してから叩く。上陸するまでは砲門を開くな」、これが栗林の作戦でした。午前十一時頃には一万人が上陸して、海岸は海兵隊員と車両で埋まり真っ黒です。栗林が待っていたのはその瞬間でした。洞窟内で息をひそめていた日本軍の一斉射撃が始まり、弾薬、ガソリンに引火爆発して大混乱になったのです。「噴進砲」と呼んでいた七十門の新兵器ロケット砲、命中精度はまだまだ低いものでしたが、こんな密集している敵の攻撃には絶好でした。戦車二十八台が擱座し、「負傷者続出、早く病院船を回せ」。慌てふためく米軍のナマ電報を、日本軍司令部はキャッチしています。米軍は夕方には橋頭堡を確保し三万人の上陸を終えましたが、死傷者二千四百人の大きな損害を出したのです。

米軍は夜になると、日本軍得意の夜襲攻撃を予想して防衛線を固めましたが、やはり日本軍はやって来ません。栗林は「血気の勇」を厳しく戒め、手薄な弾薬、ガソリン集積所だけを狙って、小人数の部隊に攻撃させました。戦いは一寸刻みの地上対地下の戦闘になったのです。日本軍は砲爆撃が続いている間は洞窟内に息をひそめ、敵が接近すると射撃陣地に飛び出して攻撃します。迫撃砲やロケット砲は二、三発撃つと地下壕に担ぎ込み、地下の坑道を通って別の陣地に移動して、また攻撃をするのです。米軍はこうした陣地を一つ一つ、火炎放射器や爆薬で潰してから前進するしかありません。米軍が一日に前進出来たのは、千人以上の死傷者と引き替えに百㍍か二百㍍。米軍司令部が「上陸三日間で一分間に喪失三名、世界で一番攻めにくい島だ」と発表したほどでした。

そんな中で攻防の焦点となってきたのが南端にある摺鉢山です。高さ百六十九㍍の山は、日本の将兵にとっては島そのものを象徴する存在でした。島のどこからでも見え、「雨が降るかな」と云っては仰ぎ、「空襲！」の叫び声に思わず山の方に目をこらすのが習慣になっていました。しかも島内を一望出来るのですから間違いなく戦術上の要衝であり、米軍も最大の砲爆撃を集中したのです。栗林にとってただ一つ作戦計画が狂ったのは、摺鉢山の海軍砲台が米軍上陸前の十八日に敵艦船を砲撃してしまったことです。位置を暴露したため、十四㌢砲二門と十二㌢砲八門は砲爆撃を集中され、破壊されてしまいました。海軍砲台とすれば、我がもの顔に走り回る敵艦にせめて一矢報いたい。この思いだったのでしょうが、

摺鉢山の持久力を弱める結果になったのです。

摺鉢山は連続七日間の砲爆撃で火だるま、千七百人の陸海軍守備隊もほとんど全滅し、アメリカ海兵隊が山頂を占領したのは二十三日午前六時二十分でした。シュライヤー中尉と四人の部下が、長さ六㍍の鉄パイプに小さな星条旗を結びつけて頂上に立てると、山麓、海岸の海兵隊員からは「ワー」と歓声が挙がり、海上の輸送船も一斉に汽笛を鳴らします。しかし海兵隊のカメラマンがカメラを構えた瞬間です。手榴弾が投げ込まれ、二人の日本兵が斬り込んできたのです。ＡＰ通信の特派員ローゼンソールによって、縦一・四㍍、横二・四㍍の大星条旗を翻す写真が撮られたのは、日本兵の掃討が終わった二時間後でした。この写真は二十五日付の全米朝刊各紙の一面トップを大きく飾り、アメリカ国民を感動の渦に巻き込んだのです。アメリカ人なら硫黄島を知らない者は誰一人なく、戦時献金も爆発的な記録を作りました。そしてワシントンの「無名戦士の墓地」には、第二次大戦最大の激戦の象徴として、海兵隊員が山頂に星条旗を押し立てている銅像が建てられたのです。

観戦に来ていた海軍長官フォレスタルも感激して、スピーカーで海兵隊員を激励しました。「マウント・スリバチは陥落した。頑張れ、諸君。あとたった数㌔で全島を占領出来る」。しかし栗林の本格的な抵抗は、まだまだこれからだったのです。激しい攻防は舞台を中央台地に移して続き、二十六日には予備の海兵第三師団も投入されましたが、高地を占領したかと思うと、背後から砲弾、機銃弾が飛んできます。慌てて退却し、戦車を先頭に火炎放射器を振り回して進むと、日本軍はさっと退きます。ひと息ついた途端、また集中砲火を浴びて退却、こんな戦闘の繰り返しでした。

それにしても驚くのは、アメリカの飛行場修復力です。米軍は上陸翌日の二十日に千鳥飛行場を占領すると、二十四日から修復作業にかかりましたが、Ｂ29の司令官ルメイにとっては、不時着緊急避難の場を硫黄島に確保出来たわけです。さっそく軍需工場への昼間高高度爆撃から、大都市への夜間、無差別焼夷弾攻撃に切り替える、その実験とも云うべき爆撃を実施したのです。二月二十五日、東京は昼過ぎから大雪になりましたが、二百機のＢ29がレーダー照準で四百五十三㌧の焼夷弾をばら撒きました。東京に対する初めての本格的焼夷弾攻撃で、二万戸が被災し、ルメイは「日本の大都市は千七百㌧程度の焼夷弾で壊滅出来る」。こう確信して、三月十日の東京大空襲となったのです。

目標には焼夷弾攻撃の効果を最大限に発揮するため、中小家内工業地区で木造家屋が密集している下町が選ばれました。九日夜十時半、関東地方に警戒警報が発令されましたが、少数のＢ29が爆弾も落とさずに去ったため、間もなく解除になりました。実際は、日本のレーダー攪乱を狙って大量の銀箔を撒きに来たもので、そのうえ本土沿岸のレーダーは折からの二十㍍以上の強風でほとんど正常に

作動しません。マリアナ基地を発進した三百三十四機、この大編隊が続々と近付いているのを全く察知出来なかったのです。第一弾が江東・木場に投下されたのが十日午前零時八分。いきなり空襲警報が鳴った十五分には、すでに各所から火の手が上がっていて、烈風に煽られたちまち燃え広がっていきました。

マリアナからだと、爆弾は普通B29一機に五トンしか積めません。それを対空砲火、迎撃戦闘機も恐れずに夜間低空攻撃にして、一部の機銃まで外して最大量の六トン。実に二千トン、十九万発もの焼夷弾を搭載したのです。先頭集団はまず油脂性のナパーム弾を投下しました。非常に点火しやすく高熱で長時間燃え、猛烈な火災を起こします。これで「火の壁」を作っておいて、M69焼夷弾を投下したのです。中に三十八本または七十二本の小型焼夷弾が詰まっていて、空中で分解するとバラバラ降ってきます。地上からは、「火の雨が降るように見えた」そうです。しかも防火訓練のバケツ・リレーよろしく、水をかけでもしようものなら炎はかえって大きくなります。火は火を呼んで下町一帯は火の海。一瞬に四方を炎で囲まれた市民は、逃げ場を失い悲惨でした。火の中の蒸し焼き、黒焦げのマネキン人形同然となり、学校の大きな防空壕に逃げ込んだ人たちはすし詰め状態で窒息したのです。死者の数は帝都防空本部が八万八千七百九十三人としていますが、十万人を超えると云われます。下町はほぼ全滅し、焼失家屋二十六万七千百七十一戸、被災者百万人を超える空前の大火災でした。

この間、硫黄島では孤立無援の激戦が続いていました。二月二十八日には連合艦隊司令長官豊田副武大将から激励電報が来ましたが、それは「まともな救援は出来ないが、あと二か月、四月一杯米軍を釘づけにしてくれ。そうすれば沖縄と本土決戦の準備が出来る」。要するに「犠牲になれ」と云う、何とも非情なものでした。捕虜になって生還した兵隊の話だと、日本機が珍しく飛んできて落下傘で補給品を投下したんだそうです。決死隊を募って回収したところが、梱包の中身はわずかな雷管と竹槍だけ。「竹槍で戦えと云うのか、余りにむごいではないか」と泣いたと云います。飛行機だって決死の思いで飛んだのでしょうが、もうこの頃には小銃の充足率は五割。本土決戦に備えて陸軍百五十万、海軍四十万の大動員を決めても、小銃さえ満足に渡せなくなっている当時の日本の実情を物語っています。

三月四日には残存兵力四千百、前線指揮官の三分の二が戦死し、火砲もそのほとんどを失っていました。海軍司令部が「帝国海軍万歳、勝利を確信す」と打電してきたのは三月十七日、もう暗号書を焼却して平文でした。ぎりぎりまで玉砕突撃を禁じてきた栗林もこの日、大本営への訣別電報を書き終わり、十八日午前零時を期して打電するよう命じています。「麾下将兵の敢闘は真に鬼神を泣かしむるものあり。特に想像を越えたる物量的優勢を以てする陸海空からの攻撃に対し宛然徒手空拳を以てよく健闘を続けたるは、小職自らいささか喜びとする所なり。

今や弾丸尽き、水涸れ、全員反撃し最後の敢闘を行なわんとするに当り」として「たとい魂魄となるも、誓って皇軍の捲土重来の魁たらんことを期す。ひたすら皇国の必勝と安泰を祈念しつつ永へに御別れ申し上ぐ」。まさに圧倒的な米軍に徒手空拳で戦ったのですが、「終わりに左記駄作、御笑覧に供す」と、二首の短歌が添えられていました。「国の為 重きつとめを果し得で 矢弾の尽き果て 散るぞ悲しき」、「仇討たで 野辺には朽ちじ 兵はまた七度生れて 矛を執らむぞ」。

大本営は二十一日、硫黄島将兵の「十七日玉砕」を発表しましたが、栗林以下北地区の将兵は地下でまだ戦っていたのです。米軍がマイクで「栗林閣下出てきて下さい。戦争はもう終わりました。兵隊を無理に殺さないで下さい」と放送するのが聞こえたそうです。北東海岸では、第二十六戦車連隊を率いて戦ってきた西竹一中佐が、部下十五人と共に断崖に追い詰められていました。西は明治の外相西徳二郎の長男で男爵、昭和七年のロサンゼルス・オリンピック馬術の金メダリストです。米軍も知っていて、「バロン西、出てきて下さい」と呼びかけましたが、重傷を負っていた西は二十一日頃、笑って腹を切ったと云います。

二十三日、父島からの呼び出しに応えて「父島の皆さん、さようなら」の打電を最後に通信は途絶えました。白ダスキをかけた栗林が、残存将兵四百名の先頭に立って出撃したのは二十六日の未明です。途中負傷して動けなくなると、幕僚に「拳銃で頭を撃つように」命じたと云われます。戦死した海軍通信参謀の腹巻からは、海軍部隊指揮官市丸利之助少将の「ルーズベルト二与フルノ書」と題する文書が発見されています。市丸は「予科練育ての親」と云われた人で、第二十七航空戦隊司令官として硫黄島に着任しました。「これは本戦闘の終りに当り、貴下に送る最後の一言である」。こう云う書き出しで始まる書簡は、筆で海軍用箋八枚に日英両文で書かれており、市丸が死に臨んでルーズベルト大統領に自分の真意を伝えたいと準備したものでした。「真珠湾攻撃の不意打ちを以て対日戦争唯一の宣伝材料にしているが、日本が自滅から免れるためこの挙に出るほかない窮境にまで追い詰めた情勢は、貴方が最もよく知っていることではないか」。そして「白色人種は黄色人種の犠牲の上に繁栄を誇ってきた。自分たちは豊かな勢力圏を持っているのに、なぜアジア人がアジア人のためにする希望の芽を摘み取り、妨害しようとするのか」と、その貪欲、狭量を責めています。いわば日米開戦に当たって、当時の日本人の多くが持っていた感情を代表したものでしたが、この書簡の原本は現在アメリカ海軍兵学校のアナポリス記念館に保存されているそうです。

日本軍の組織的な戦闘は終わりましたが、硫黄島三十六日間の戦いで日本軍の戦死一万九千九百、捕虜になって生還した者千三十三人。これに対して米軍は戦死六千八百二十一、戦傷二万一千八百六十五人。米軍が反攻に出てから、米軍の損害が日本軍を上回った唯一の戦闘でした。しかし海軍作戦部長のキング元帥が

「硫黄島の攻略以後、同島に不時着して救助された人命だけでも、同島の攻略に当って払った犠牲より多かった」。こう評価しているように、硫黄島には二千二百五十一機のB29が不時着し、二万四千七百六十一人の搭乗員の命が救われたのです。三月十二日には爆撃機用の滑走路が完成しました。B29の爆弾搭載量もぐんと増えましたし、長距離戦闘機P51が発進して、B29の援護に当たると共に関東、東海地区を縦横に荒らし回りました。そして二十七日には関門海峡に一千個の機雷が投下され、「海の日本封鎖」も始まったのです。

×　　×

話を昭和二十年の初めに戻しますと、米軍は新年早々フィリピンのルソン島に進攻してきました。一月六日からリンガエン湾の艦砲射撃が始まり、九日には五個師団二十万を上陸させてきたのです。「レイテ戦こそ今次戦争の天王山」と言い続けてきた小磯国昭首相でしたが、陸軍が知らないうちに「レイテ決戦」を止めてしまい、「ルソンで決戦する」と云います。仕方なく「比島全域が天王山」と言い換えたのですが、もうとても決戦出来るような状態ではなかったのです。山下奉文大将率いる第十四方面軍は総数二十八万、数こそ遜色ないものでしたが、戦車、大砲、小銃とどれをとっても、質でも量でも次元が基本的に違っていました。その上、精鋭の二個師団と多くの軍需品をレイテに送り出していて、航空支援や後方補給も望めません。第三十五軍の作戦参謀加登川幸太郎中佐は「戦闘というよりも一種の持久だった。拠点と云っても陣地もなく、ただその辺りで生きていくと云うだけであった」と云っています。そこにあるだけの貧しい装備と食糧で、ただ持ちこたえるだけの戦いになっていったのです。

戦局の悪化と共に、「もはや敗戦は必至だ」という見方、そして「終戦による事態の収拾を急ぐべきだ」と云った動きが、ようやく支配層の一部や有識者の間にも出てきました。四つほどの流れがあって、みんなどこかでつながっていて、中心にいたのは、もともと開戦には反対だった元首相の近衛文麿です。その近衛は敗戦後の十一月、自殺する直前ですが、アメリカ戦略爆撃調査団の質問に答えて「戦争終結に一番熱心に奔走したのは、現在の外相吉田茂あたりではないでしょうか」と云っています。吉田は当時近衛より十三歳年上の六十六歳、近衛が何かにつけて「吉田君、吉田君」と云って相談するほど、近衛の最大の協力者でした。もっとも「大胆率直さは吉田の地」と云われたくらい、気の強い吉田のことです。イギリス大使を退官して浪人している時、近衛が十五年九月に日独伊三国同盟を結んだものですから、「日本を亡国に導くものだ」と憤慨し、絶縁状まで叩きつけたのですが、開戦と共に「この戦争を終わらせるのはやはり近衛しかいない」と仲直りしていました。吉田はミッドウェー海戦が大敗した直後の十七年六月、全般的にはまだ日本の威勢のいい頃でしたが、早くも内大臣の木戸幸一に「近衛を終戦工作にスイスに派遣するよう」申し入れています。

吉田のグループは、吉田内閣の行政管理庁長官、法務総裁になる殖田俊吉、政治評論家の岩淵達雄、馬場恒吾、二・二六事件直後、皇道派として予備役になった元陸軍中将の小畑敏四郎、薩摩出身の海軍大将樺山資紀の長男愛輔、それに元老西園寺公望の秘書役をして近衛や木戸とも友達づきあいの原田熊雄です。近衛は皇道派贔屓でしたし、岩淵や馬場も新聞記者時代から小畑と親しく、よく近衛邸に通っていました。殖田は大蔵省出身ですが、昭和三年に田中義一首相の秘書官となったところ、田中が外相も兼任したため外相秘書官も兼ねたのですが、外務次官になった吉田が「二役では大変だろう」とボーナスを前の次官の三倍もはずんでくれたんだそうです。それ以来意気投合し、吉田の同志になっていました。樺山はアメリカに留学して通信社や日米協会を設立し、グルー駐日大使をはじめアメリカ人に友人の多い人でした。

海軍では高木惣吉少将が、小磯内閣で海軍大臣に返り咲いた米内光政、次官の井上成美の特命で密かに終戦工作を進めていました。高木は「終戦工作最大の難事は、革命の危険を冒さないで陸軍を説得することだった」。こう云っていますが、十九年秋から毎週一回、三年前百歳の高齢で亡くなった重光葵外相秘書官の加瀬俊一さん、陸相秘書官の松谷誠大佐、内大臣秘書官長の松平康昌とこの四人で集まり、情報交換をしていました。松谷は戦争指導班長時代、サイパン放棄の決定に「日本の負けであり、戦争を収拾する方向に向かえ」と云う意見書を出して東条英機首相の激怒を買い、支那派遣軍参謀に追われた人です。四か月ほどで陸相秘書官に戻ってきましたが、松谷を通じて陸軍を切り崩す狙いであり、松平は宮中工作、さらには宮中の動きを知るためでした。

高木が一月二十六日のことですが、軍令部総長の及川古志郎大将に戦局の見通しを尋ねたところ、「重体ではあるが、危篤とは見ない」と云います。ルソンの戦いについても、参謀総長の梅津美治郎大将から聞いた話としてこう云うのです。「敵の動員し得る陸上兵力は、洗い浚い出したところで十個師団。我が方の在比兵力は五個師団で、そう悲観することはない。むしろ思う壺で、我が方は東西山麓の堅固な陣地に立て籠もったのだから、敵が中央平地を真っすぐに南下出来ようとも思われぬ」。日本軍には堅固どころか拠るべき陣地もなく、米軍はすでに中央平地を突破しクラーク空軍基地に突入しようとしているのです。高木に云わせると「悪いことは信じまいと云うのが、彼らの態度だった。及川も梅津も、自分たちの楽観論を信じているのではなかった。部下に対して、外部に対して、そして天皇に対して、楽観論を説かねばならないと彼らは信じているのだった」。高木に「終戦を急がねば」の気持ちが強くなっていきます。

私が凄いなと思ったのは、加瀬俊一さんの呼び掛けで出来た「三年会」です。加瀬さんが暮れに箱根のフジヤ・ホテルで作家の山本有三と会った際、敗戦の避けられない情勢を話して、「平和回復の促進と、戦後の国内の混乱を防ぐにはどう

したらよいか。それを研究する愛国的な思想家グループを作りたい」。こう訴えたところ、近衛と一高同期の山本は近衛からいろいろ話を聞いていますから、すっかり共鳴し、すぐ作家の志賀直哉に電話をかけたのです。志賀は作家の武者小路実篤を誘ったうえで、法政大学教授の谷川徹三に人選を相談しました。谷川は昭和十五年、当時海軍省の調査課長をしていた高木から「海軍に助言してほしい」と頼まれ、思想懇談会を作って幹事をしていましたから、その仲間から選んだのが、東京帝大教授の和辻哲郎、田中耕太郎、富塚清、一高校長の安倍能成です。メンバーは九人で、文化勲章五人、文化功労者一人。まさに日本の知性を代表する顔触れでした。

一月十二日に麹町三年町の外相官邸で第一回会合を開いたので、会の名称を「三年会」、会の目的を「日本の将来を考えること」としましたが、志賀直哉が「残念会にならねばよいが」とシャレたので、みんな大笑いしたそうです。その志賀はすぐ、東村山の病院に入院している次女寿々子の夫に手紙を書いています。「戦局の進み方によっては病院そのものがいつまで続くかというような事にも不安を感じます。フィリッピン決戦の結果によってはそういう時が案外早く来るかも知れぬという話、二週間程前政府の多少責任ある人からきいて、心配しています」。多少責任責任ある人とは加瀬さんのことですが、いわばリベラリストの集まりが外相官邸を根城にしたのですから当然重光外相も了解ずみのことで、富塚の「戦中日記」には重光がこんな話をしたことが出ています。「軍も満州事変だけでやめておけば、全く満点でした。だが、あそこでやめられなかったというのが歴史的必然というものでしょうね。北支だけだったら、まだましだった。あそこまでは認めようとイギリスもいったんですからね。だが、そこで留まれなかった。あれから先は正しくく乱心です。その乱心者を叩きつぶさねば…とアメリカ側は思っているわけです」。私もその通りだと思いますが、重光はさらに「天皇が戦局を憂えていること、その大御心を国民の心としたい。それは平和的なお心である」と云っています。またアメリカの雑誌「ライフ」に天皇のことをＴｈｅ ｌａｓｔ ｓｕｐｐｏｒｔｅｒ ｏｆ ｐｅａｃｅ、「平和の最後の支持者」と書いてあること、すると和辻が観兵式の写真説明に、Ｔｈｅ ｐｒｉｓｏｎｅｒ ｏｆ ｈｉｓ ｏｗｎ ｐｏｗｅｒ、「彼自身の権力、軍部の囚人」とあったと、アメリカの天皇観を紹介しています。

富塚が谷川に呼ばれて行くと、「この調子では国内がやがて大混乱になるだろう。その時の用意をしておこう」と云います。結局「日本としては天皇を中心に国を立て直して行くべきではないか。ロシアとアメリカとの間をうまく泳ぐことも必要、急いではいけない。また、どうやるにしても、反対はある。一億玉砕を主張するのもある。そういうのをどうして押えて行くか？　天皇のお声がかりが一番だろうとなった」と、「戦中日記」にあります。高木少将も「最後は陛下に決断し

てもらう以外に、陸軍を抑える切札はない」と考えていましたし、重光外相も「最後は鶴の一声」と肚を決めていましたから、「聖断」が和平派の結論になっていたわけです。

こうしたグループの中で政局を動かす大きな力を持っているとなると、重臣の結束で東条内閣を倒したように、やはり重臣でした。近衛は十九年九月から、岡田啓介、若槻礼次郎、平沼騏一郎の四人で、毎月第二火曜日に目白の近衛の別邸に集まり、定期的に意見交換をするようになっていました。吉田が岩淵、小畑と近衛を訪ねたのが、米軍のリンガエン湾艦砲射撃が始まった一月六日です。風邪気味だと云って毛糸の襟巻に首を埋めている近衛に、三人は「近衛内閣を作って終戦に持って行くこと、その第一歩として近衛から天皇に、和平を急ぐ必要があることを進言すべきだ」と説いたのです。近衛は、上奏については賛成の様子でしたが、決断のないこの人のことです。自ら内閣を組織して陸軍を相手に終戦させる決心は、とてもつかなかったのでしょう。簡単には腰をあげようとはしません。吉田はその足で原田熊雄を訪ね、原田からも内大臣の木戸に重臣拝謁を働きかけさせました。

昭和天皇もこの日、木戸に「比島の戦況は愈々重大となるが、其の結果如何によりては重臣等の意向を聴く要もあらんと思ふが如何」と、重臣との会合を希望されています。十三日にも催促されましたが、木戸は慎重でした。重臣拝謁は開戦以来、一度も行なわれていません。軍部から和平論者と見られている重臣の動きが表面化することは、憲兵の目が光っていて危険でした。この頃政治向きのことで拝謁を許されたのは、木戸は別として、首相、陸海軍の責任者に関係閣僚くらいのもので、そのため天皇は常に水増しの戦果を聞かされ、戦局の厳しさも正確には知り得ない状態に置かれていたわけです。

とうとう吉田がしびれを切らして、湯河原にいる近衛の所へ小畑をやって、早く上奏を行なうよう、せっつかせました。近衛もようやく一月三十日、岡田ら四人で集まり、「お上よりこの際、軍に対し戦争の見通しにつき御下問ありて然るべし」と重臣の意見を纏めて木戸に伝えたのです。木戸は軍部に対する天皇の下問には「時機に非ず」と消極的でしたが、重臣拝謁については「考慮している」と云います。木戸が考えたのは、公然と実施すれば軍部を刺激する恐れがあり、「寒中ご機嫌伺い」と云う名目です。この正月は、空襲が始まったため新年参賀は取り止めになっていました。一方、重臣には暑中と寒中に陛下のお見舞いに参上する慣習があり、新年参賀がなかったのだから、せめて寒中お見舞いくらいは慣例通りしてもらおうと云うわけです。その際せっかくだから、たとえ少ない時間でも陛下に難局に対する所信を直接話して頂く。目立たないように、二月七日から重臣を一人ずつ個別に招いて上奏が行なわれることになったのです。

木戸は重臣拝謁を決めた後、秘書官長の松平に云ったそうです。「あの人たち

と会ったところで私と同一意見だ。彼らは和平論者と世間から認められている。内大臣たる私が彼らと会えば、私が和平運動に関係することになり、ひいては陛下もその中に数えられ、陛下を全くその反対の勢力の中にとられてしまったりしては、事が破れる。ここしばらくは木戸は頑迷だ、戦争継続論者だと思われてもよろしい。今に解る時も来る。国家が救われれば、それでよろしいのである」。木戸自身、原田熊雄に終戦を考えたのは「陛下のお気持ちを察して二月頃じゃないかと思うな、何とかせにゃいかんと…」。こう語っていますが、木戸もこの頃から本土決戦の前に和平の機会をとらえる決意を固め、動き出します。

しかし木戸の軍部に対する警戒心は、決して杞憂ではなかったのです。近衛の別荘があり、政財界人が疎開したりして往来の激しい軽井沢、箱根、さらには原田の住んでいる大磯、ここには吉田の別邸もあって、東京憲兵隊と陸軍省の資料調査部がそれぞれ密偵チームを置いて厳重に監視していました。種村大佐は二月七日の「大本営機密日誌」に、憲兵司令官の報告として「国内における和平策動者としては吉田茂、樺山愛輔、原田熊雄らで、近衛文麿、岡田啓介に連絡が密である。これ等の方法はヴァチカンを通ずる者、在支中立国人を利用せんとするものである。国内はいよいよ騒然としてきたようである」と書いています。

二月に入ってからの海外電報は、「米英ソの三国首脳が秘密会談を行なっている」としきりに伝えていました。場所はどこか、内容は何かと、世界の注目が集まりましたが、三国は厳重な報道管制を敷いて、全ては秘密に包まれていたのです。会談が二月四日から始まり、開催地がソ連の黒海北岸クリミア半島のヤルタだとわかったのは最終日の十一日、共同宣言が発表されてからでした。これが戦後日本の運命を決めた「ヤルタ会談」です。日本政府に宣言内容が届いたのは十三日の夕方でしたが、誰もがまず探したのは日本についての言及があるかどうかでした。ところが「ドイツは三国で分割占領、これにフランスが加わる余地を残す」、「連合国による平和機構、これは国際連合のことですが、その創立会議を四月二十五日、サンフランシスコで開く」。こうあるだけで、日本やアジアの一字もないのです。果たしてそれだけなのか？。日本にとって気がかりは十六年四月に締結した日ソ中立条約です。有効期間は五年、批准は四月二十五日ですから、もし延長しない場合は一年前、この二十四日の夜十二時までに通告しなければなりません。しかも四月二十五日を選んで、サンフランシスコにソ連代表を招いて会議を開くのは、その変更を示唆するものではないか。気になるところでした。

重光外相はじめ誰もが待ちわびていたソ連大使佐藤尚武の電報が届いたのは二月二十三日です。モロトフ外相は前日、佐藤の質問に答えて「日本に関することは不思議にも話題にものぼりませんでした」、そして「ソ連の日本に対する方針には何の変更もない」と太鼓判を押したと云うのです。佐藤がホッとして「日本は日ソ中立条約の延長を希望している」と告げると、モロトフは「多忙のためにまだ研

究してないので追って話をしたい」とはぐらかし、即答を避けます。佐藤は「中立条約ついては日を改めて話そうと友好的だ」と報告してきましたが、そのモロトフは四月五日、佐藤大使にぬけぬけと日ソ中立条約は延長しないと通告したのです。実はこのヤルタ会談では「ソ連がドイツ降伏の二、三か月後に対日参戦をする」。こう云う重大な密約が交わされていたのです。アメリカ統合幕僚会議の判断では、日本を屈伏させるには少なくとも十八か月を要し、百万の死傷者が見込まれました。最小の損害で最大の勝利を得るには、ソ連の対日参戦が最も望ましい。これがルーズベルト大統領はじめ米国首脳の立場です。スターリンはすでに十八年十月、モスクワを訪れたハル国務長官に非公式に対日参戦の意向を表明していました。それを確実なものにしようと迫るルーズベルト、スターリンの方は日本の関東軍が相次ぐ南方戦線転用で、ほとんど無力化していることを知っていました。この有利な立場をフルに利用して、南樺太と千島の回復、外蒙古独立、そして中国には断りもなしに海軍基地としての旅順の租借権回復、東清鉄道と南満州鉄道の中ソ共同経営など、全ての条件をルーズベルトに呑ませたのです。

ヤルタ会談ではもう一つ、重要な軍事的決定が行なわれています。日本に対する無条件降伏の再確認です。会談の途中、イギリスのチャーチル首相が「日本に条件付降伏を認めてはどうか」と発言し、米軍首脳部も「それなら出血を避けられる」と期待しましたが、ルーズベルトとスターリンが反対しました。ルーズベルトにとって、日本が再び侵略国にならないように撃破するには無条件降伏以外にはなかったし、スターリンとしても黙っていても「おいしいご馳走」が手に入るのに、それをむざむざ捨てるわけもありません。この決定は、日本に条件付和平の道を閉ざすことになりました。ルーズベルトは二か月後の四月十二日、脳溢血で急死しますが、この密約を知っていたのはアメリカ側でも二、三の軍首脳に限られ、副大統領のトルーマンも大統領になって初めて知ったんだそうです。蒋介石は後でアメリカ大使からこの勝手な密約を知らされ、茫然としたのでしょう。その席に立ち合った在支米軍司令官のウェデマイヤー中将は、回顧録に「蒋介石が示した反応を決して忘れることは出来ない」。こう書いて、連合国はソ連の戦後に対する意図を誤ったとして、回顧録のタイトルを「第二次大戦に勝者なし」としたほどでした。

もしこの時、日本の首脳部がこの密約を知っていたらどうだったでしょうか。当然、戦争終結を急いでいたでしょう。実は海外公館からは「要注意」の警戒電報が来ていたのです。大島浩ドイツ大使は「ストックホルム情報」として「スターリンは日本に対する政策変更に同意した」、ポルトガル公使の森島守人も「スターリンは中立条約の廃棄並びに対日戦を決意したと考えられる節がある」と、地元リスボン発行の新聞の解説を報告してきました。また岡本季正スウェーデン公使は二十六日着の重光外相宛電報で、「四月二十五日に特にサンフランシスコで行な

うことを発表したのは、ソ連が中立条約の廃棄通告を行い、この会議で日本を共同の敵と宣言することになるのではないか」と、的確な見解を具申しています。

もっと決定的だったのは、スウェーデン駐在陸軍武官小野寺信少将の「ソ連の対日参戦が決まった」と云う電報だったでしょう。情報提供者である元ポーランド陸軍の参謀将校から寄せられた情報で、暗号電報の作業を受け持っていた小野寺の妻百合子は「バルト海のほとりにて」と云う本に、「特に心して暗号に組んだことを覚えている」と書いています。ところが東京からは何の返答もなかったのです。小野寺は十六年六月に独ソ戦が勃発した時も、一か月以上も前から「ドイツはソ連に向けて開戦準備をしている」と再三打電していました。しかし「独ソ不可侵条約を結んでいるドイツが独ソ戦なんてあり得ない」と、参謀本部に無視されました。今度も参謀本部によって握り潰されたのか。小野寺が電報が中央に届いていないことを知ったのは、三十八年後の昭和五十八年、佐藤大使の書いた本に「自分も政府もそれを知らなかったのは不覚であった」とあるのを読んだ時でした。百合子は「その時の夫の驚きは大変なものであった」と書いています。

いずれにしろ、重光外相はじめ政府首脳部が、このヤルタ会談の内容を厳密に検討しなかった罪は大変大きかったと云っていいでしょう。スターリンは十九年十一月の革命記念日に、日本を「侵略国だ」と非難演説しているのです。疑って当然でしたが、「溺れる者は藁をも掴む」と云うのか、日本外交は馬鹿正直にそのソ連を仲介とする和平交渉に望みをかけて、混迷を繰り返すことになります。

こうした中で、二月七日から二十六日にかけて重臣上奏が行なわれたのです。平沼を皮切りに広田弘毅、近衛、若槻、岡田、東条の順で元首相六人、この間に元内大臣の牧野伸顕が入り、朝鮮総督の阿部信行と海軍大臣の米内は現職にあるため召されませんでした。しかし若槻が「前以て遠慮なく腹心を吐露しようじゃないか」と申し合わせて意気込んでいたのに、いざ陛下の前に出ると、「目のあたりに陛下の御英姿を拝して『降参しなさい』という意味のことはは、なんとしても言上できなかった」。こう云っているように、ほとんどが結論らしい結論もなく曖昧な形で終わった中で、異色は近衛、ただ一人強気なのは東条でした。

近衛の上奏は十四日でしたが、二日前から上京して平河町の吉田邸に泊まり込み、二人で上奏文を練り上げたのです。和紙八枚に書かれた書き出しは「敗戦は遺憾ながら最早必至なりと存じ候」。ズバリ核心をつくものでしたが、さすがの近衛も天皇の前では「敗戦」とは云えず、「最悪なる事態」と言い換えて上奏を始めたのだそうです。近衛が国体護持の立場から恐れたのは、その「最悪なる事態」よりも、それによって起こる共産革命でした。とにかくヒステリックなほどの赤化恐怖症、随所に「共産革命」と云う言葉が出てきます。生活の窮乏による労働者的発言の増大、英米に対する敵愾心昂揚の反面である親ソ気分、新官僚や軍部内の革新運動から、一億玉砕を叫ぶ者さえ「共産分子」になってしまうのです。

侍従長の藤田尚徳によると、天皇も「内心でその特異さに驚かれた御様子」だったと云いますが、近衛は「勝利の見込みない戦争をこれ以上継続するのは、全く共産党の手に乗るものだから、一日も速やかに戦争終結を講ずべきだ」。「終戦を急げ」と云う結論だけはハッキリ述べました。しかし、一番肝心な、どうすればよいのかと云う点になると、最大の障害は満州事変以来今日の事態にまで推進してきた軍部内の「かの一味」の存在にある。「かの一味」とは東条に代表される統制派のことですが、彼らはすでに戦争遂行に自信を失っているのに、今までの面目上、あくまで抵抗するだろう。だから「共産革命」から日本を救うには、この一味を一掃して軍の建て直しを行なうことが肝要だ。言い換えれば「皇道派を起用しろ」と云う以外には、具体策は何一つないのです。それでも近衛は、「思い切って腹蔵のないところを申し上げてきた」とニコニコしながら帰ってきましたが、やがてこの「近衛上奏文」を憲兵に握られて、肝を冷やすことになります。

東条の上奏は二月二十六日でした。ヤルタ会談で決まった四月二十五日のサンフランシスコ会議開催、この日が日ソ中立条約の不延長通告期限であるのに注目して、「敵はこの日を目標にあらゆる手を打ってくる」とか「この日に各国を集めて日本が手も足も出せぬという状態を見せようとする」とか、四月二十五日の日付を十二回も繰り返しています。ところが戦局判断となると、米軍がすでに硫黄島に上陸して来ていると云うのに、「只今深刻ニ太平洋上ニ起リツツアル進展ニ対シテハ全体的ニ観察シテ成功不成功相半スト見ル」。藤田は「侍従長の回想」に東条の認識は「陛下を驚かせ、陛下の御表情にも、ありありと御不満の模様が見られた」と書いていますが、東条は委細構わずに雄弁を続けました。

二月十六、十七日の艦載機本土来襲も、サイパン進攻の時は一週間も継続したのに、本土近海では一日半以上留まることが出来なかった。硫黄島は米本土から八千キロなのに、日本は千数百キロ。補給能力は距離の自乗に逆比例するから、日本は作戦的にも余裕があると云うのです。補給なんて考えたこともなかったし、第一、補給をしようにも物資もなく、制空権、制海権を完全に奪われて何も出来ない状況を、どう考えていたのでしょうか。本土空襲も「近代戦の観点からすれば序の口だ。このくらいのことに日本国民がへこたれるならば、大東亜戦争完遂などと大きなことは云えぬ」。そして「四月二十五日にソ連は中立条約廃棄の通告をしてくるかも知れない。こうなっても、我は正義の上に立つ戦なりと皇国不滅の精神に立つならば、悲観には及ばぬ」と、精神論で結んだのです。これが首相、陸軍大臣に参謀総長まで兼務して、二年九か月にわたって戦争指導をしたきた人の戦局判断なのです。藤田侍従長は云っています。「陛下の心中深く、戦争終結のご決心がついたのも、あの重臣上奏のころであったと拝察する。だれが陛下のお心に近く、だれが離れていたか、遠近の差はあったにしても、だれ一人、陛下のお心そのもに合ったものでなかったという印象を受けた」。

そこへ三月十日、東京大空襲が下町を襲いました。空襲被害の状況は毎朝、侍従武官長が天皇に報告することになっていましたが、この朝だけは容易に集まりません。しかもそれは、だんだん容易でない数字の集積となっていったのです。天皇は即座に「被災地をこの目で見たい」と云われました。それも側近に何度も、何人にも云われたと云います。行幸は戦前は大変な行事でした。前年十月の靖国神社臨時大祭の時は、宮城から九段までのわずかな距離に、六百人の制服警官と二百人の私服が並び、一㍍間隔で人垣を作っています。しかも、いつ空襲があるかわかりません。結局、木戸内大臣の「思いきり簡単な方式で、ほとんど突然お出ましという形で」。この意向で、十八日午前九時出発、十時帰還の予定で深川の富岡八幡宮に行かれたのです。

焼け跡にはまだ死臭が漂っていました。被災者は突然、軍服姿の天皇を見て驚きの表情で迎え、天皇もモンペ姿、防空頭巾姿にいちいち会釈されます。木戸は日記に「一望涯々たる焼野原、真に感無量なるものあり、この灰の中より新日本の生れ出でんことを祈念す」。余りの被害に茫然としながらも、「新生日本」に思いを馳せて戦争終結の決意を固めていきます。天皇は予定より長く、二時間近い視察を終えた時、藤田侍従長に「これで東京も焦土になったね」と云われたそうです。「収拾を急がなくては」の思いが強くなったのではないでしょうか。天皇は終戦の決断をされた時、こう歌われています。「爆撃にたふれゆく 民の上をおもひ いくさとめけり 身はいかならむとも」、「身はいかになるとも いくさとどめけり ただたふれゆく 民をおもひて」。天皇の心境はこの御製に言い尽されていますが、その思いはこの下町視察が出発点だったと思います。

こうして「重臣上奏」そのものは、直接には余り意味のないものに終わりましたが、一つの大きな成果をもたらしました。戦争終結を模索しようとする天皇と木戸の意図が合致し、宮中政治の流れに明確な方向づけがされたことです。しかし天皇が戦後間もなく、侍従長の藤田に「あの戦争のさ中に和平を言い出したら、大変な内乱になったろう」と云われたように、終戦を表立って口にすることはまだまだタブーでした。藤田は「私の実感としては、当時和平のことを口に出したら、政治家であれ軍人であれ、たちどころに陸軍の者に殺されてしまうだろうと思われたほどです」と話しています。

そして四月十五日、吉田茂をはじめ殖田俊吉、岩淵辰雄、馬場恒吾の四人が東京憲兵隊に逮捕されてしまったのです。きっかけは近衛上奏文です。上奏は「雲の上のこと」ですから、本来は外に洩れるはずがないのですが、吉田は上奏文を練り上げた時、近衛から吉田の岳父である牧野伸顕に「ぜひ見せてほしい」。こう頼まれて写しをとり大磯の別邸に保管していましたが、書生が陸軍のスパイで写真に撮っていたのです。東部憲兵司令官の大谷敬二郎少将の話だと、「憲兵隊は吉田の平河邸には書生、女中をスパイに入れて十分監視をしていたが、大磯の別

邸は万全とはいえなかった。ただ非常によく働く書生がいて、二重戸籍を持っているので不審に思い、身辺内偵中だった」。それが陸軍省資料調査部のスパイだったわけですが、上奏文の内容は陸軍を驚かせるものでした。大谷は「一番驚いたのは、日本は日一日と共産化に向かって進んでおり、その張本人は軍人の一味であり、軍の粛正が肝要だと云う点だった」と云っています。それでは、なぜ近衛を逮捕しなかったのか？。大谷は「もしやれば、近衛ら重臣に東条内閣を倒され、陸軍はその仕返しに近衛を失脚させるためにやったと、世間からとられかねない。だから、近衛ら重臣には手をのばさないと決めていた。ただこの際、吉田に連なる反戦主義者を捕まえて、高まってきた和平論に一撃を加えようとしたのだ」と云うのです。

午前六時、東京憲兵隊の検挙班が踏み込み家宅捜索をしましたが、目指す上奏文の写しは見つかりませんでした。吉田がとっさに「小りんさん」と呼ばれる、吉田の世話をしていた坂本喜代子に、「これは大事なものだから隠しておいてくれ」と、その写しを近衛や原田の手紙と一緒に手渡したんだそうです。坂本が帯の間にしまい込んだのを確認して、吉田は「原田に、今うちに憲兵が来ているから、そっちにも行くと思うと連絡してくれ」。こう言い置いて、九段の憲兵司令部に連行されました。吉田の家には電話がなく、坂本は書生がスパイとも知らずに近くの牛乳屋から、四㌔ほど離れた原田の家に電話させたんだそうです。

吉田の容疑は軍事上の流言蜚語。つまり近衛上奏文を筆写して流布した疑い、軍は自信を失い、士気沈滞しているとの反戦言動、軍の赤化という中傷言動を流布した疑いです。吉田は高齢ということもあって、一定時間の散歩、平河町からの食事の差し入れも許され、吉田も「丁重に扱われた」と云っています。しかし吉田の方は、取り調べには地そのままに傲慢そのもので一切否認。一緒に逮捕された殖田の調書を突き付けられても、「それはあいつが勝手に喋ったことだ」と受け付けません。それでも自分で筆写した上奏文の写真には参ったと見えて、調書には「私の思慮の至らないため、軍を誹謗してまことに申し訳ないことをした。この点お許しを願いたい。心境を新たに、戦争遂行に一国民として協力したい」。こんな神妙な詫びを入れてはいますが、同じ調書には「誰が何と云ったって、英米と仲良くしないと日本は繁栄する国ではない。戦争は一日も早くやめよ、英米に負けても国体は滅びない。国内が赤化されれば滅亡あるのみだ」と、相変わらず持論を展開しているのです。

陸軍省法務局は起訴を主張しましたが、新しく陸軍大臣になった阿南惟幾の裁断で不起訴になり、吉田は五月三十日、四十五日ぶりに釈放されました。シラミに食われて化膿した頭に包帯をグルグル巻きにしていたそうですが、いかにも吉田らしいと思うのは、吉田はどうもこの書生がスパイだと知っていて、平気で使っていたようなのです。清沢洌の十九年十二月七日の日記には「加納久朗氏の話

によると、吉田茂のところにも憲兵隊がスパイを書生に住み込ませたとのことである」とあります。加納は上総一宮藩主の末裔で昭和三十七年に千葉県知事をした人ですが、吉田が駐英大使時代、正金銀行のロンドン支店長をしていて昵懇の間柄であり、吉田本人から聞いた話でしょう。しかも、そのスパイ書生が戦後間もなく「上官の命とはいえ、申し訳ないことをしました」と謝りに来ると、吉田は「忠実に任務を遂行したのだから、別に謝る必要はない」。こう言って、乞われるままに「この者勤務ぶり真に良好なり」と紹介状まで書いて、知人に就職を世話してやったと云うのです。「吉田逮捕」をめぐる後日談ですが、重光葵に云わせると「あの人はそみにある土瓶でも茶碗でもすぐ持って駆け出す人だよ」。まさに吉田茂こそは、終戦和平に向けて命懸けで駆け出した人であり、また鳩山一郎の「吉田君はこれで最高の免罪符を手に入れた」。この言葉のように、戦後の政権担当の道が開かれます。

硫黄島を攻略した米軍は息もつかせずに三月二十六日、沖縄西部の慶良間列島に上陸、四月一日には沖縄本島に上陸してきました。「三年会」の富塚清は日記に書いています。「戦況はすこぶるわるいが、国民は、そう悲観するに及ばぬ。もう、次の時代が目の前に迫っている。また、一億玉砕なんてかけ声も出ているが、そんなことはやらすべきでないし、またやらそうとしたって簡単にできるものか」。私は戦後日本が廃墟から立ち直ることが出来たのは、こうした「三年会」の人たちが早くから「この日ある」を予期して、次の時代を開いていったこと、精神的な支えの基盤を作ったことが大きかったように思うのです。

東京大空襲の三月十日、近衛ら四人の重臣が第一生命会館に集まった時、平沼が「もう小磯内閣では駄目だ。後は鈴木貫太郎さんに頼んだらどうです」と提案しています。退役海軍大将の鈴木は、侍従長のとき二・二六事件で襲われ瀕死の重傷を負いましたが、十九年に枢密院議長になっていました。そして三月二十七日には、重臣の意向は「鈴木を首相に、阿南を陸相とする内閣」に纏まり、岡田が木戸を訪ねると、すでに小磯を見限っていた木戸も賛成し、後継内閣構想が固まったのです。こうして小磯内閣が四月五日に総辞職、鈴木内閣となるのですが、二月に「鈴木貫太郎内閣成立、その日大和は沈んだ」というテーマでお話します。